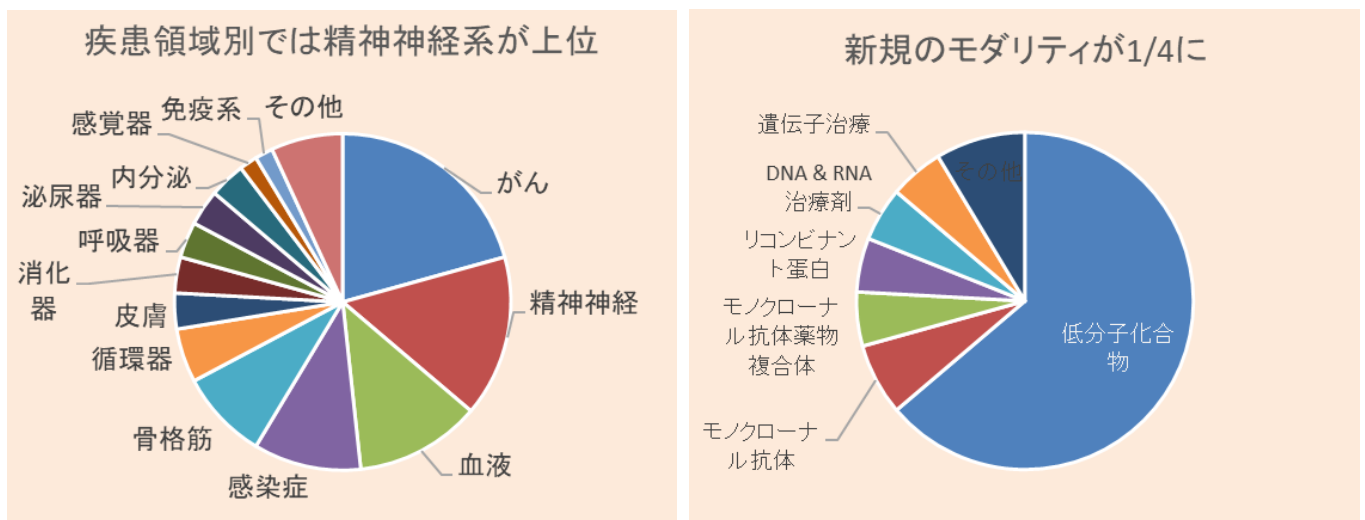


2019年の新薬：市場構造に変化の兆し

2019年に登場した新薬を見ると、疾患領域、創出国、オリジン、モダリティのどれをとっても変化が窺える。主流だったがんや感染症の治療薬が存在感を低下させ、昨年の新薬の適応疾患は多岐に渡っている。モダリティも多様な技術が活用されている。この流れを作っているのは日本の製薬企業とベンチャー、これが新潮流だ。

2019年に日米欧のいずれかで初めて承認された薬剤は58品目で、昨年より2品目少ない。疾患領域別に見ると、がんが最も多く、次いで精神神経系、血液疾患の順である（左下の図）。精神神経系治療薬が比較的多いことは2019年の特徴の一つである。モダリティでは低分子化合物が約60%を占める（右下の図）。モノクローナル抗体と抗体薬物複合体は、それぞれ4品目と3品目。新しい技術が着実に実用化されている。遺伝子治療なども含め、モダリティの種類が増えたことも特徴。



新薬のオリジンを見たものが左下の図。バイオベンチャーが起源となったものが最も多く、40%である。2018年は57%であったので、大幅な割合の減少である。一方で、中小製薬企業は31%となり、前年の13%から大きく伸びている。大手製薬企業は18%で、前年（22%）から多少の減少である。創出国別で見ると、米国は最も多くの新薬を生み出しているが、前年に比べると割合は大きく減少している（右下の図）。逆に健闘しているのは日本である。

2019年の新薬は、どの指標を見ても、ここ数年のトレンドとは異なっている。新たな潮流の始まりかもしれない。

